

多彩な可能性を秘めた「プラムのパラブル」 ——パラブルと『ユリシーズ』*

永 嶋 友

はじめに

アイルランドの作家ジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882–1941) が短篇集『ダブリナーズ』 (*Dubliners*, 1914) の出版をグラント・リチャーズ (Grant Richards) に初めて依頼した際、リチャーズはその原稿を自分で読む前に、まず彼の印刷工に渡し、その印刷工がこの短篇集の「二人の伊達男」 (“Two Gallants”) は出版に値しないと判断を下した。リチャーズは、印刷工の判断は民衆の大多数の意見を示すものだと、彼にしたがった。ジョイスはそれに納得がいかず、1906年6月10日の手紙でリチャーズに対して、「二人の批評家を雇ってください。[...] それぞれ七つの新聞で武装した公正で強力な二人を——〈誰が耐えられるだろうか〉。パラブルを話しています。」 (*Letters* 2: 140) と言いはなった。¹⁾つまり、ジョイスは印刷工の意見をそのまま受けいれたリチャーズに対して、七という象徴的な数字や詩篇からの引用を使い、「二人の伊達男」に掛けて二人の公正な批評家ならばこの物語の本質を理解してくれるはずだと言って、ユーモアを交えて抗議したのである。ジョイスは、このように、パラブルを使って、物事の本質や実体を軽視し、不誠実な態度を示す人物を説得しようとしたことが実際にあった。しかし、リチャーズがすぐに意見を変えるのではなく (*Letters* 2: 141), 『ダブリナーズ』の出版は1914年6月15日まで待つことになった。

ジョイスとパラブルと言えば、1904年6月16日のダブリンの一日を描くジョイスの小説『ユリシーズ』 (*Ulysses*, 1922) の第7挿話のおわりで、若きジョイ

スモデルとする芸術家志望の青年スティーヴン・デダラス (Stephen Dedalus) が、同様に、フリーマンズ・ジャーナル社 (*The Freeman's Journal Company*) のイヴニング・テレグラフ編集室 (*The Evening Telegraph Office*) の人々を前に「ピスガ山より臨むパレスチナ、あるいは、プラムのパラブル」 (*A Pisgah Sight of Palestine or The Parable of The Plums*) を語っている。²⁾この「プラムのパラブル」は、どのように解釈することができるだろうか。また、どのような効果が考えられるだろうか。上記のリチャーズに対するジョイスの発言のように、物事の本質や実体を軽視し、不誠実な態度を示す相手の説得を意図するものだろうか。

『ユリシーズ』第7挿話は、ジョイスが1920年9月21日にカルロ・リナーティ (Carlo Linati) に送った『ユリシーズ』計画表が示すように、タイトルは嵐の神「アイオロス (Aeolus)」、技術は「雄弁術」と「比喩」、科学／芸術は「修辞学」であり (Ellmann 192), フリーマンズ社とその周辺を舞台に、多くの登場人物が雄弁や言語に関わる様々な会話や思考を嵐のように展開している。本挿話は、先行研究においては、ジョイスが1921年に加筆した63の見出し、語りの転回、テキストの自己反映性、実際の新聞社の間取りとの比較、活字の書体や字配りなど、様々な観点から分析されている (Bazargan; Beck; Donovan; MacDuff; 山田)。R・B・カーシュナー (R. B. Kershner) の論考のように、ジョイスが参照したと思われる当時の新聞記事と本挿話の類似を考察するものもある。同様に、スティーヴンの「プラムのパラブル」も様々な分析されている。たとえば、彼の物語をささげる外部因子 (聴衆の声や街の音)、内部因子 (スティーヴンの思考)、形式的因子 (見出し) に注目するもの、物語の登場人物を神話の人物と比較するもの、物語の性的含意を読み、それを1904年のアイルランドの社会的政治的文脈にあてはめるものなどがある (Briskin; Frumkin; Weir)。

しかし、先行研究は、概して、なぜスティーヴンは編集室の人々に「プラムのパラブル」を語るのかについて説得力のある答えを提示できていない。そこで、本稿は、イエス・キリスト (Jesus Christ) のパラブルを手掛かりとして、また、スティーヴンの「プラムのパラブル」がフリーマンズ社の関係者たち、中でも編集室の人々を意識して、彼らを前に語られる物語であることを念頭において、『ユリシーズ』第7挿話全体を再考し、スティーヴンが彼らに「プラム

のパラブル」を語る理由と、「プラムのパラブル」の解釈や聞き手や語り手に対する効果について論じたい。また、『ユリシーズ』第17挿話でスティーヴンから「プラムのパラブル」を聴く人物、すなわち、フリーマンズ社の広告取りをする中年ユダヤ人男性レオポルド・ブルーム (Leopold Bloom) を比較対象として分析し、最終的には、「プラムのパラブル」や『ユリシーズ』が聞き手や読み手に求めていることについて少し考察を加えたい。

パラブルを語る理由

The Oxford English Dictionary が示すように、パラブルは「道徳的・宗教的教訓や見識を伝える（しばしば写実的な）物語や話——特に、イエスが福音書で語るもの」を指している（“parable, n.”）。スティーヴンが自分の物語をパラブルと呼ぶ以上、ジョイス／スティーヴンはイエスのパラブルを意識しているはずである。そのため、スティーヴンが『ユリシーズ』第7挿話でパラブルを語る理由を考える前に、イエスがパラブルを語る理由を確認したい。スティーヴンの「プラムのパラブル」とイエスのパラブルの関係性は、シャリ・ベンストック (Shari Benstock), ドン・ギフォード (Don Gifford), サム・スロート (Sam Sloate) によってすでに指摘されているものの (723-24; 152; 620), イエスのパラブルの意義や効果の考察、また、それをもとにしたスティーヴンの「プラムのパラブル」の詳しい考察はなく、本稿は彼らの欠落部分を補完し、議論を大いに発展させることを意図している。

イエスが福音書で語るパラブルは百篇以上あり、形式や長さは様々である。おおまかに分類すると、金言やことわざ (maxims, proverbs), 直喩 (similes), 隠喩 (metaphors), なぞなぞ (riddles), 現実の典型的な事象による比喩 (similitudes), 特殊な事象を描く架空の物語による比喩 (狭義の parables), 寓話 (allegories) などの小ジャンルに分けられるが、二つ以上の小ジャンルにあてはまる例もあり、それぞれの境界もあいまいである。実存主義的、脱構築的、あるいは、読者志向的な聖書解釈アプローチをとるならば、それぞれの話には正解となる決まった解釈が必ずあるわけではなく、聞き手や読み手のとらえ方次第で、様々な意

味が生み出される可能性がある。また、聞き手／聴き手を意識して語られるものが多くあり、時に相手を説得したり、相手の気持ちや行動を変えたりと、様々な効果を発揮している (Stein 30-47)。ハンナ・アレント (Hannah Arendt) は、イエスの教えのある側面は「もともとキリスト教の宗教的託宣と関係がなく、イスラエルの公的権威に挑戦的な態度をとっていた彼の従者たちとの親密で小さな共同体の経験から生まれている」と主張しているが (375)、同様に、イエスのパラブルのいくつかには、政治的な解釈を加えることが可能である。

イエスがパラブルを語る理由は、その内容や語られる状況によって、様々な考えられるが、根幹をなすものとしては、彼の聴衆が口先だけで見た、聞いたと言ひ、物事の本質や実体を理解していないことが挙げられる。イエスは弟子たちに次のように説明している。

あなたたち〔イエスの弟子たち〕には天の国の秘密を知ることが許されているが、彼ら〔大勢の群衆〕にはそれが許されていないからである。〔…〕

だから私〔イエス〕は彼らにパラブルを話す。彼らは見ても見ず、聞いても聴かず、理解しないからである。

彼らによってイザヤの預言は実現した。「あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。

この民の心は硬くなり、彼らの耳は遠くなり、目は閉じてしまった。決して目で見ようせず、耳で聴こうとせず、心で理解しようせず、悔い改めず、私に癒されることがないためである。〕³⁾

(*The Bible: Authorized King James Version*, Matt. 13: 11-15)

イエスはこれを、パラブルに関するパラブルとも呼ばれる「種をまく人のパラブル」で言い換えている (Hooker 87)。種をまく人 (イエス) によってまかれた種 (御言葉、神の国の言葉) は、あるものは「道端に落ち、鳥が来て食べてしま」い、あるものは「石だらけで土の少ないところに落ち〔…〕枯れてしま」い、また、あるものは「茨の間に落ち、茨がのびてそれをふさいでしまった」。ところが、ほかの種は「良い土地に落ち、実を結んで」、三十から百倍にもなった。この一連のたとえは、それぞれ、御言葉を聞いても悟らず、「悪い人

[に] […] 心の中にまかれたものを奪い取」られてしまう人、「根がないので、しばらく続いても、御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐつまずいてしまう」人、「世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人」、そして、「御言葉を聴いて悟る人」を表わすとイエスは言う (Matt. 13: 4-8, 18-23)。

イエスは弟子たちにこのように説明する一方で、彼を囲んでいた群集にはその説明を与えずにいる。それは、イエスがパラブルを語りながら、聴衆が彼のパラブルを本当に理解できるかどうか試しているからだと考えられる (Benstock 723-24)。聴衆を試し、良い人と悪い人とを峻別することは、彼の「麦と毒麦のパラブル」でも暗示されている。良い種がまかれて、麦 (御国の子、神の国の子) が育った畑に、敵によって毒麦 (悪い者の子) がまかれたとしても、「刈り入れまで、両方とも育つままにしておき」、刈り入れ (世の終わり) の際に、「まずは毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」とイエスは言っている (Matt. 13: 24-30, 37-43)。イエスはこれを「網」で捕まえた良い魚と悪い魚を分けることや「一家の主人」が「倉から新しいものと古いものを取り出す」ことにもたとえている (Matt. 13: 47-52)。

イエスのパラブルには、彼の言葉を聴いて悟ろうとしない聴衆をあてこするものもある (Martens 151-52)。イエスがエルサレムの神殿の祭司長やファリサイ派の人々に語った「意地悪な借地人のパラブル」はその一例である。この話は、ある家の主人 (神) が自分のぶどう園 (御国、神の国) を農夫たち (祭司長やファリサイ派の人々) に貸し、その後、収穫を受け取るためにしもべや息子 (イエス) をその農夫たちのところに送るが、農夫たちは彼らをいじめたり、殺したりしてしまうというものである。その結果、ぶどう園の主人は激怒し、この農夫たちからぶどう園を取りあげるという結末がほのめかされている。このパラブルにより、祭司長やファリサイ派の人々はイエスが自分たちのことを言っていることに気づき、イエスを捕らえることを思いとどまった (Matt. 21: 33-45)。

イエスはぶどう園を彼らにではなく「それにふさわしい実を結ぶ民族」 (御言葉を聴いて悟る人) にたくすことを望んでいる (Matt. 21: 43)。イエスは同じこ

とを「からし種」と「パン種」でたとえている。からし種は「畑にまけば、どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる」。同様に、パン種は「三サトンの粉に混ぜると、やがて全体がふくれる」。つまり、イエスのパラブルはそれを深く理解しようと努める人々には大きな変化をもたらすのである (Matt. 13: 31-33; Hanger 113-16)。ただし、種は人が寝起きしている間に知らず知らずに育つとイエスが「成長する種のパラブル」で言うように、その理解と変化はすぐには得られないことが多い (Mark 4: 26-29; Hooker 96-97)。⁴⁾

以上のイエスのパラブルの考察をもとに、スティーヴンが第7挿話でフリーマンズ社の関係者たち、中でも編集室の人々を前に「プラムのパラブル」を語る理由を考えると、次のような仮説が立てられる。ジョイス／スティーヴンが「プラムのパラブル」を彼らに聞かせるのは、彼らが見るには見るが、聞くには聞くが、理解していないからであり、彼らがこのパラブルを深く理解できるか、深く理解しようと努めているかを改めて試すためである。また、ジョイス／スティーヴンはこのパラブルの中でひそかに彼らを批判している。さらに、ジョイス／スティーヴンはこのパラブルの中に、彼らにはわからない、でもわかる人にはわかる重要なメッセージを隠している。では、これらの仮説を次のセクションから検証していこう。

物事の本質や実体をとらえようとしないフリーマンズ社の関係者たち

『ユリシーズ』第7挿話には、目、視覚、光に関する言葉が多用されている (Briskin 238-39)。また、本挿話に描かれるフリーマンズ社の関係者たちは、実際イエスの聴衆のように、うわべだけで見た、聞いたなどと言い、物事の本質や実体をとらえようとしていない。これらは本挿話のおわりにスティーヴンが「プラムのパラブル」を語る伏線としてとらえることができる。すでに多くの批評家がフリーマンズ社の関係者たちの不誠実な発言や態度について論じているが (Backus; Ito; Senn; 永原; 吉田など)、彼らがイエスの聴衆のように、見るには見るが、聞くには聞くが、理解していない様子を改めて確認してみたい。

まずフリーマンズ社の印刷所の場面では、印刷所主任ジョーゼフ・ナネッティ (Joseph Nannetti) が、記者ジョー・ハインズ (Joe Hynes) が持ってきたパトリック・ディグナム (Patrick Dignam) の死亡記事に、すぐさま「印刷」の文字を書き込むところをブルームが見かけている。マーゴ・ゲイル・バックス (Margot Gayle Backus) が指摘するように、彼らの新聞記事は調査報道というより、新聞社の契約や取引に基づく埋め草的なものであって、彼らはむしろ収入に直接関係する広告を重視している。大司教の手紙、ハインズの記事、デージー校長 (Garrett Daesy) の口蹄疫に関する論文は自然と新聞社に集まってくるのに対し、広告取りのブルームは広告契約を取りに街を歩かなければならないことから当時の広告の重要性が理解できる (Backus 176)。ただし、記事の編集と同様に、広告の編集もおざなりにされていることも見逃せない。ナネッティはディグナムの死亡記事だけでなく、ブルームが持ち込んだアレグザンダー・キーズ (Alexander Keyes) の広告の切り抜きにもすぐさま「印刷」の文字を書き込もうとしている。ブルーム自身も広告の編集を「はさみとりの〔単純作業〕」(7.32) と表現し、「週刊紙が売れるのは、広告やあまり重要でない記事があるからだ」(7.89) と言っている。

次に、編集室の人々である。彼らには熱心に働いている様子はなく、むしろ、雑談、過去の演説の再現、喫煙、酒を飲みに行くことなどに夢中になっている。彼らが「新聞社の連中」(7.625) と呼ばれるゆえんはここにある。たとえば、穀物商ネッド・ランバート (Ned Lambert) は下院議員ダン・ドーソン (Dan Dawson) の愛国主義的で仰々しい演説を、それにあまり興味がないサイモン・デダラス (Simon Dedalus) らに無理やり聞かせて楽しんでいる。ブルームはダン・ドーソンの演説を「大げさなもの」と、ネッドやサイモンを「おしゃべりなやつら」と心の中で呼び、彼らと距離を置こうとする (7.260)。さらに、ブルームは、『アイリッシュ・インディペンデント』(*The Irish Independent*) からフリーマンズ社に鞍替えしたマイルズ・クロフォード編集長 (Myles Crawford) を念頭において、「滑稽だよ、こういう新聞屋は新たな風穴を嗅ぎつけるとくると向きを変えるのだから。風見鶏だ。同じ息で温めたり冷やしたり。どっちを信じたらいいかわからない。一つの話がよくても次はどうだか。新聞でが

むしゃらにやり合っていたかと思うと、それがぴたりと収まる。次の瞬間には親しい仲。」(7.308-12) と言い、新聞関係者と自己を隔てている。

ブルームはフリーマンズ社の関係者たちと少し距離を取る程度にとどまる一方、スティーヴンは心の中で編集室の人々のいいかげんな態度や発言に対してより強い不信感を示している。スティーヴンがとりわけ強い嫌悪感を示すのは、見た、わかったと何度も言いながら、物事の本質や実体を見落としている編集長のクロフォードである。クロフォードは、スティーヴンは新聞記者に向いていると勝手に判断し、「きみに何か書いてほしい。ぴりっとしたものを。きみならできる。顔をみればわかる。」(7.616) と言い、スティーヴンを新聞社の一味に加えようとしている。スティーヴンはここで、昔クロングウズ・ウッド・コレッジ (Clongowes Wood College) でドーラン神父 (Father Doran) から「顔をみればわかる。目をみればわかる。ちびの怠け者のたくらみ屋。」(7.617) と言われたことを思い出し、クロフォードやドーラン神父のようなうわべだけで物事を判断する人たちに不快感を示している。彼らの心ない態度は、スティーヴンを新聞社の仲間にあらず記者オマッデン・バーク (O'Madden Burke) の「ぎょろりと宙を見るまなざし」(7.624) にも見てとれる。その後、クロフォードは「煽情ジャーナリズムの父」(7.690) と呼ばれる自信家の記者イグネイシャス・ギャラハー (Ignatius Gallaher) をスティーヴンに紹介する。クロフォードはギャラハーの電信でフィーニックス公園殺人事件の断片を間接的に知ったにもかかわらず、この事件に関する「血みどろの歴史をすっかり」(7.676-79) 見たとスティーヴンに豪語している。クロフォードによると、ギャラハーはこの事件の発生場所や犯人たちの移動経路の位置情報を、おそらく海底電信の検閲をやりすげす目的で、新聞の「ブランソンズ・コーヒーの広告」(7.654) 上のアルファベットに変換し、『ニューヨーク・ワールド』(*The New York World*) からフリーマンズ社に海底電信で送り、フリーマンズ社に特集記事を組ませたようである。⁵⁾ロイ・K・ゴットフリード (Roy K. Gottfried) が指摘するように、ここでクロフォードはその実際の特集記事ではなく、1904年3月17日の『ウィークリー・フリーマン』(*The Weekly Freeman*) 掲載のブランソンズ・コーヒーの広告を使い、スティーヴンに事件の顛末を説明している(48)。また、クロフォー

ドは事件の発生年を 1882 年ではなく 1881 年に取り違えている。クロフォードがこのようにいいかげんに語る「歴史」に対して、ステイーヴンはここで意見することはない。しかし、心の中でステイーヴンは、歴史、そして、アイルランド人の野蛮さを世界に示したこの殺人事件は「決して目を覚ますことのない悪夢」(7.678) だと言い、クロフォードとはあきらかに異なる立場にいることを暗示している。この発言は、ステイーヴンが第 2 挿話でユダヤ人嫌いのデージー校長に言った「歴史は […] ほくがなんとか目を覚ましたと思っている悪夢です」(2.377) という一文に共鳴している。

ステイーヴンはさらに、編集室の人々がおたがいの話にあまり集中していない様子を目にしている。それはまず、スポーツ担当記者 T・レネハン (T. Lenehan) が「鉄道の線路のようなオペラはなんだ？」(7.588) という自作のなぞなぞを誰かに聞いてもらうまでに、三度 (ステイーヴンが来てからは二度) 「静かに！」、「おれのなぞなぞはどうした！」(7.514, 588) などと言い続けることで示されている。その結果、レネハンが引きだせた反応はオマデン・パークの「オペラだって？」(7.590) という一言のみで、せっかちなレネハンはその直後に答えを明かすため、これ以上この会話の進展はない。零落した法廷弁護士 J・J・オモロイ (J. J. O'Molloy) が、法廷弁護士シーマー・ブッシュ (Seymour Bushe) の演説のミケランジェロのモーセ (Moses) 像に関する箇所を朗読する場面では、レネハンが再び「静かに！」(7.759) と言って注意喚起し、ここでめずらしく編集室に静寂が訪れる。しかし、ステイーヴンはこの一時的な静寂を「うわべだけの静けさ」(7.761) ととらえ、聴衆が演説にあまり集中していない様子を感じとっているようである。続いて、イギリスのアイルランド人拘束を、エジプトのイスラエル人拘束に、また、イギリスへの屈服を説く人を、若いモーセに自由放棄を説くエジプト大司祭に重ね、アイルランド語擁護を訴えるジョン・F・テイラー (John F. Taylor) の演説を、ヒュー・マッキュー教授 (professor Hugh MacHugh) が朗読する。しかし、ステイーヴンは、この演説のように飾り立てられた話は「無意味な騒音」(7.882) のようであり、「風と共に消え [る]」(7.880) と思っている。つまり、ステイーヴンはここで、マッキューの朗読を聞く聴衆が演説を深く理解しようとしていないことを感じとっている

ようである。

このように、第7挿話では冒頭から末尾まで、イエスの聴衆のように、物事の本質や実体をとらえずに見た、聞いたと言うフリーマンズ社の関係者たちの不誠実な態度が、ブルームとスティーヴンの耳目や意識をとおして描かれている。また、フリーマンズ社の関係者たちのぞんざいな態度は、いくつかの的はずれで自己中心的な見出しにも波及し、本挿話全体を覆っていることも注目に値する。そのため、本挿話に見出しを加えているのは、物事の本質や実体をとらえようとしない編集長クロフォードだという指摘（東川 74-75）は、一理ある。

物事を深く正しく理解しようとしなない編集室のならず者たちに対して、スティーヴンはしばしば強い不信感を抱いているが、その一方で、ロバート・スポー（Robert Spoo）も指摘しているように（120）、意外にもスティーヴンが彼らに興味を示す場面があることも忘れてはならない。スティーヴンは、ブッシュ演説を朗読するオモロイの「言葉と身ぶりの優雅さ」（7.776）に感動した様子で、顔を赤らめている。その後、オモロイがスティーヴンはジョージ・ラッセル（AE, George Russell）をからかっているにちがいないとユニヴァーシティ・コレッジ教授ウィリアム・マギニス（William Magennis）が話していたと言うと、スティーヴンは「なんて言ったんだ？ぼくについてなんて言ったんだ？」（7.789）と心の中で興奮気味に反応している。スティーヴンはここでオモロイが『アイリッシュ・ホームステッド』（*The Irish Homestead*）の編集者ラッセルとつながりがあることを知り、芸術家として成功するためにも、編集室の人々とある程度の交友関係を築く必要性を感じているようだ。また、「無意味な騒音」のようなテイラー演説をマッキューから聞いているときも、スティーヴンは「高貴な言葉が続くぞ。注意しろ。きみも自分でやってみてはどうだ？」（7.836）と内心で言い、朗読を半ば楽しみ、そこからインスピレーションを得ている。⁶「預言的ヴィジョン」（7.910）があるとクロフォードが形容するこのテイラー演説を聞き終え、スティーヴンはさらに気分をよくしたようで、えせモーセ気取りで編集室の人々を酒場へ導き、「ダブリン。ぼくはまだまだ学ぶべきものがある。[…] ぼくにもヴィジョンがある。」（7.915-17）と言い、その道中でブッシ

ユ演説やテイラー演説に反応するかたちで「プラムのパラブル」を披露している。

したがって、ステイーヴンは編集室の人々の不誠実な態度に不信感を抱きつつも、意外にも彼らが朗読する演説に感化され、また、彼らとある程度の交友関係を築く必要性を感じている状況で「プラムのパラブル」を語っているのである。この状況を踏まえた上で、では、実際に「プラムのパラブル」を考察していこう。

多彩な可能性を秘めた「プラムのパラブル」

ステイーヴンはブッシュ演説やテイラー演説からインスピレーションを得て、想像力を働かせ、一時間ほど前にサンディマウントの海岸で見かけた二人の女性 (3.29-32) をネルソン塔に登る二人の老婦人に変え、彼女たちをピスガ山から約束の地を眺めるモーセに重ね合わせている。ステイーヴンの「ピスガ山より臨むパレスチナ、あるいは、プラムのパラブル」のあらすじは、次の通りである。ダブリンのブラックピッツに住む二人の貞操を守る老婦人、アン・カーズ (Anne Kearns) とフローレンス・マッケイブ (Florence MacCabe) は貯金箱のお金を切り崩し、街で豚の煮ごりとパンと熟れたプラムを買い、「ダブリンの眺め」(7.931) を求めて、ネルソン塔へピクニックに出かける。高い塔を苦勞して登り、塔上で煮ごりとパンを食べたあと、彼女たちはカトリック教会の屋根を見下ろし、塔の頂上のイギリス海軍提督ホレイショ・ネルソン (Horatio Nelson) の像を見上げるが、しだいにめまいや首のしびれを感じ、疲れ果てて、見下ろすことも、見上げることも、話すこともできなくなる。ついには、プラムの袋を二人の間に広げ、次々プラムにかぶりつき、その種を柵の間から塔の下へそっと吐き出し始める。

ステイーヴンが語り始める直前に「ダブリナーズ」(7.922) と心の中で言うこともあり、一見すると、ステイーヴンの「プラムのパラブル」は、ジョイスの『ダブリナーズ』と同様に、主としてダブリン市民の麻痺を冷淡に、やや一面的に映し出すものに思えるかもしれない。しかし、この物語は、実際のとこ

ろ、自己肯定、自己否定、他者肯定、他者否定、理想、現実、事実、虚構などを複雑に混ぜあわせ、新たに中庸の精神を映し出している。ジョイス／ステイーヴンはイエスのように自分でこの物語を解説することはないので、読者がこのパラブルのすべてを解き明かすことはもちろん不可能である。しかし、ステイーヴンが前述した状況で、イエスのパラブルを意識して語っていると考えられる場合、この物語は以下のように解釈することができるだろう。

まず、ジョイス／ステイーヴンはおそらく煽動ジャーナリストたちの関心をひく目的で、意識的に下品な笑いをこの物語に持ちこんでいる。ステイーヴンは、人妻エマ・ハミルトン (Emma Hamilton) と不倫した隻腕のネルソンを片手付き鍋のように「片手付き間男」(7.1018) と形容し、茶化している。老婦人たちが食べるプラムには、性的な意味合いが読み取れる。それは、『ユリシーズ』全体を通して、ブルームがふと目にする「プラムツリーの瓶詰肉」(5.145) の新聞広告、「やつ〔ボイラン〕はプラムの実を食べて、おれは〔ブルーム〕は種だけ。」(13.1098-99) というブルームの発言、そして、ブルーム宅の台所で発見される「プラムツリーの瓶詰肉の空瓶」(17.304) などがモリー・ブルーム (Molly Bloom) とヒュー・ボイラン (Hugh Boylan) の不義の密会を暗示していることから、推測することができる。この文脈では、老婦人たちが「口からたれる果汁をハンカチで拭きつつ」(7.1026-27) プラムの種を街にとばすことは、彼女たちの卑猥さ、下品さを強調するものとしてとらえられる。そして、これらの描写は、結果として、クロフォードとマクヒューを笑わせ、彼らの興味をひくことに成功している。

少し見方を変えると、塔の上でめまいや首のしびれを感じながらも、カトリック教会とイギリスの支配を甘受し、塔の上でいくぶん下品に振るまい、楽しんでいる老婦人たちは、ダブリン大司教や『ニューヨーク・ワールド』と結託し、アイルランドのスキャンダルや殺人事件を記事のネタにする煽動ジャーナリストたちをひそかに風刺するものとも考えられる。塔の上から種を吐き出す老婦人たちは、ネルソンが自分の子種をまき散らし、ダブリン、そして、アイルランドを統治するのを手助けしているかのようなのである。間男ネルソンは、人妻キャサリン・オシー (Katherine O'Shea) と不倫したチャールズ・スチュワー

ト・パーネル (Charles Stewart Parnell) を思い出させる。その文脈では、老婦人たちは、『アイリッシュ・インディペンデント』からフリーマンズ社に鞍替えし、親パーネル派から反パーネル派に転身し、パーネルの実だけを食べて種を吐きすてた編集長クロフォード、また、同様の手のひら返しをしたアイルランド人たちを暗示しているようにも思える。

一方で、めまいや首のしびれからダブリンの眺めを楽しめず、話すこともできなくなる純潔を守る老婦人たちは、カトリック教会とイギリスの支配によって自由な表現や生産性が奪われたアイルランドの人々を表わしているとも考えられる。キャスリーン・ニ・フーリハン (Cathleen ni Houlihan) のように、貧しい老女はアイルランドを擬人化している。ステイーヴンが編集室の人々に対して不信感を抱きつつも、ダブリン大司教や『ニューヨーク・ワールド』と連携している彼らに向かって、直接その気持ちを表現することができないでいることを考えるならば、塔の上の老婦人たちはステイーヴン自身を表わしているとも解釈できる。新聞社の連中は物事の本質や実体を無視する人々であるのに対し、ステイーヴンはそれらを理解していながら自由に表現できないでいる人物なのである。ステイーヴンはその実、第1挿話では、えせ司祭を演じるバック・マリガン (Buck Mulligan) とイギリス人のヘインズ (Haines) を前に肩身がせまい思いをしている。

他方で、塔の上からプラムの種を地上にそっと送ることが権威者による支配からの独立を表わしているとも考えられる。プラムは砂漠でも育つことから忠誠と独立を象徴するとスロートは指摘している (620)。アイリーン・ブリスキン (Irene Briskin) はこの老女たちをギリシャ神話の老怪三姉妹グライアイ (the Graeae) として、また、老婦人たちが食べるプラムを洞察力や認識力を象徴するグライアイの一つの眼としてとらえ、この裏づけとして、フランス語の単語 *prunelle* が眼球とプラムの一種の両方を意味することをあげている (237)。ブリスキンはプラムの種を街にとばすことについて考察していないが、老婦人たちが食べるプラムを洞察眼とする場合、プラムの種をとばすことは洞察眼の一部を塔の上からダブリンの地上にかろうじて届ける行為としても解釈できるはずだ。それはちょうど青年ペルセウスがグライアイの眼球を持ちだす行為にも

重なる。つまり、ジョイス／ステイーヴンは、ここで自由を求めて自分の洞察力を、ダブリンの眺めをとらえられない権威者のもとからダブリンの地上にどうにか降ろそうとしていると考えられる。事実、ステイーヴンはマーテロー塔のマリガンとヘインズ、また、学校のデージー校長から離れ、サンディマウントの海岸や新聞社からパブへと向かう道中で、芸術家としての才能を徐々に開花させている。

ステイーヴンは「突然大きな若々しい笑い声」(7.1028)をあげて「プラムのパラブル」を締めくくっている。彼の大笑いは、クロフォードとマッキューを笑わせたこの物語の性的で下品な描写を得意げに自負するものとも考えられるが、ステイーヴンがイエスのようにパラブルを語り、聴衆の反応をみて、編集室の人々が物語を表面的にしか理解していないことを確認し、勝ち誇っている様子を示すものとも考えられるだろう。クロフォードは老婦人たちがスカートをまくり上げる場面では「詩人の特権はないぞ。ここは大司教区だからな。」(7.1015-16)と言い、また、彼女たちがプラムの種をとばす場面では「これくらい悪さで済むならな。」(7.1031)と言い、ステイーヴンの下品な表現に氣を取られるばかりで、この物語を深く解釈しようとしていない。ジョイス／ステイーヴンがクロフォードにこのパラブルを半分ほどしか聞かせないのは、これを見越してのことかもしれない。同様にマッキューは、「片手付き間男」という表現をひどく気に入り、「そういうことか。言いたいことがわかったぞ。」(7.1019)と興奮ぎみに反応し、また、展望のないアイルランドの容認を暗示する「〈神はわれらにこの安楽を作りたまいし〉」(7.1056)というラテン語の題をステイーヴンにすすめることからわかるように、この物語を表面的にとらえている。ただし、マッキューはステイーヴンのパラブルを聞き、「他人に対して、自分に対して、どちらにより辛辣なのか誰もわからない」(7.1036-37)アンテイステネス (Antisthenes) のことに言及するので、塔の上の老婦人たちがステイーヴン自身を含むアイルランドの人々を表わしていること、また、この物語にはなにか辛辣なメッセージがあることに感づいているのかもしれない。しかし、マッキューの言葉を受けてステイーヴンが途中で思いうかべる、不倫を公然と貫きとおし幸せを勝ちとった十六世紀の貴婦人「ペネロピ・リッチ

(Penelope Rich)」(7.1040) が示唆するように、スティーヴンのパラブルには辛辣な皮肉だけでなく、前述した通り、彼が目指す勝利も隠されており、マッキューはそれに気づいていない。また、クロフォードもマッキューも（おそらく同行しているレネハンやオモロイらも）自分たちがこの物語でからかわれているとは知らず、スティーヴンの急進的な考えにも気づかず、この物語を好意的に受けとっているようである。

したがって、まとめると、スティーヴンはイエスのパラブルにならい、うわべだけで見た、聞いたと言うフリーマンズ社の人々、特に編集室の人々に向けて語った「プラムのパラブル」において、性的で下品な描写を差しこむことで彼らの関心をひき、彼らと親交を深めるきっかけを作りつつ、スティーヴン自身を含むアイルランドの人々の苦境をひそかに描き、それを甘受している彼らを隠れてあざ笑い、その苦難から脱する願望をひそかに提示し、そして、彼らの反応から、彼らがパラブルを深く理解していないことを確認し、勝ち誇ったと言えるだろう。スティーヴンがこのような物語を編みだすことができたのは、スティーヴンが物事の本質や実体を無視して話す編集室のならず者たちと内心で敵対しつつも、彼らの朗読する演説や文人との交友関係にやや興味を感じているという軽い板ばさみの状況にあったからであり、むしろ、そのような状況下だからこそ、多彩な可能性を秘めた「プラムのパラブル」を語ることを選んだとも考えられる。もちろん「プラムのパラブル」は他にも様々に解釈することができるはずだ。その解釈可能性の広さを考えるならば、種を主題として扱うスティーヴンのパラブルは、イエスの「種をまく人のパラブル」と同様に、パラブルの多義性とそれを解釈しようと努力する聴き手や読み手の真摯な姿勢の重要性を教訓として提示していると考えてもいいだろう。そして、話を聞いてうわべですぐに、見えた、わかったなどと言い、物語の真意を理解したかのような態度をとるクロフォードやマッキューは、この教訓を得ることができていないのである。

「プラムのパラブル」は、このように、中庸の精神で自己肯定、自己否定、他者肯定、他者否定、理想、現実、事実、虚構などを複雑に混ぜあわせており、奥深い作品に仕上がっている。バッカスが指摘するように、スティーヴン

がここで歩み始める「自己暴露と〔…〕自己隠滅の中道」は、イカロス (Icarus) のような飛翔後の墜落を避ける一策となっていると考えられる (115, 161-62)。つまり、ジョイス／ステイーヴンは、ダブリンの権威者や煽動ジャーナリストたちを高めから批判すること、また、彼らからの独立を高々と主張することが自分の立場を危うくする可能性があることを理解し、今後は地面の様子を確認して低く飛ぼうと、つまり、彼らの嗜好に気を遣いつつ、彼らに対する辛辣な批判をカモフラージュしつつ、自己表現しようとしているのである。この中道性の点で、「プラムのパラブル」は、第2挿話でステイーヴンが出題した陰鬱な狐のなぞなぞよりも、第3挿話で彼が創作／剽窃した加害者と被害者を表裏一体とする吸血鬼の詩よりも、深みが増していると言える。また、「プラムのパラブル」が示唆する物語の多義性、聴き手や読み手の解釈努力の重要性、神話や古典の枠を利用してダブリンを描く技法、中庸の精神で罪やスキャンダルを同毒療法的に扱う技法、さらには、敗北から勝利に至るといふ主題は、ステイーヴンが第9挿話で語るシェイクスピア論、ひいては、ジョイスの『ユリシーズ』そのものにも当てはまる。第7挿話は文体や語りの観点から『ユリシーズ』の前半から後半への転換が始まる章としてとらえられることがあるが (Lawrence 56-79; Riquelme 186-87)、その転換はステイーヴンの芸術が大きく変化していることでも示されているのである。

ステイーヴンの「プラムのパラブル」は編集室の人々の空論と同じように「それ自体の力を持っていない」という指摘もあるが (永原 199)、必ずしもそうとは言い切れない。第7挿話はステイーヴンがパラブルを語り終えてから五十行ばかりで終わってしまうので、確かに、彼のパラブルは編集室の人々を一時的に楽しませただけだったかのように思える。しかし、マーゴ・ノリス (Margot Norris) が論じるように、第9挿話におけるステイーヴンの状況とすりあわせて考えると、『ユリシーズ』のテキストの外の話になるが、ステイーヴンの「プラムのパラブル」は、彼と編集室の人々が向かった先のムーニーズ酒場で、編集室の人々の思考や行動を少なからず動かした可能性が考えられる。「プラムのパラブル」を好意的に受け取ったマッキューやオモロイらは、この酒場でステイーヴンから彼の物の見方や考え方などについてくわしく聞き、反

対に、ステイーヴンは彼らから再度ラッセルの編集する雑誌やジョージ・ムーア (George Moore) が催す文人や知識人の夜会の話聞いたかもしれない。そして、マッキューやオモロイらとの会話を受けて、ステイーヴンは決心し、マリガンとヘインズに決別の電報を打ち、図書館にいるラッセルやその他の文学者たちに会いに行き、ステイーヴンがラッセルをからかっているという誤解を解き、さらに彼らの前でシェイクスピア論を披露することで、芸術家として成功する道を模索しようとしたのかもしれない (Norris 39-40)。このノリスの推論に沿って考えてみると、ステイーヴンは「プラムのパラブル」で、急進的な自己願望や他者批判の内容を編集室の人々に悟られないように表現しつつ、性的で下品な描写で彼らを楽しませ、彼らのその後の思考や行動を自分の意図する方向に変え、ラッセルやムーアに関する情報を聞き出したかもしれない、ということもできるだろう。相手を悟らせずに相手の行動を変え、それによって、芸術家としてのステイーヴンの人生を劇的に好転させたかもしれない「プラムのパラブル」は、イエスの「意地悪な借地人のパラブル」のように相手を悟らせて相手の行動を変えるパラブルよりも、数歩進んだパラブルであると言えるかもしれない。ステイーヴンの「プラムのパラブル」は多彩な可能性が秘められた物語であった。

おわりに——良い聴き手としてのブルーム、『ユリシーズ』の良い読み手

ステイーヴンの「プラムのパラブル」には、このように、彼の願望に加え、彼の人生を劇的に好転させる可能性が秘められていた。しかしながら、ステイーヴンは、第7挿話で編集室の人々に語った「プラムのパラブル」、第9挿話でラッセルやその他の文学者たちに語ったシェイクスピア論のいかにもなく、『ユリシーズ』が描く1日においては、彼の芸術を世に出す可能性を得られずに終わっている。ステイーヴンは、その後、第15挿話で夜の街で酒におぼれ、第17挿話でブルームに連れられてブルーム宅にやってくる。ステイーヴンはここで、奇しくも、新聞社の広告取りで、芸術の出版とは少しかけ離れているブルームに「プラムのパラブル」を語っている。第17挿話は教義問答形式で

書かれているため、やや推測の多い考察にならざるを得ないが、最後に、この場面におけるスティーヴンの「プラムのパラブル」の意義や効果、語り手と聴き手の様子を考察してみたい。

『ユリシーズ』第17挿話のこの場面では、スティーヴンが「プラムのパラブル」を語る様子の描写は読者に与えられず、代わりに彼のパラブルを聴くブルームの心情が教義問答形式で提示されている。ブルームは個人的な連想を様々抱きながらも、スティーヴンの「プラムのパラブル」を静かに聴き通す点で、編集室の人々とは明らかに異なっている。まず、ブルームは頭によぎる父の自殺の「情景を客人〔スティーヴン〕のために言葉にして描く」ことを控え、「相手の顔を見て、相手の言葉〔「プラムのパラブル」〕を聴く」ことに注意を向けている(17.636-38)。ブルームはスティーヴンのパラブルを聴き、それを「道徳的金言」に結びつけ、それは「模範的教育的主題」としても、「発行部数も支払い能力も確かな媒体で出版」するにしても、「理解のある聴衆への知的刺激」としても成功すると考え、その作品の「経済的、社会的、個人的、および男女関係における成功の可能性」を感じている(17.643-52)。ブルームは、おそらく「プラムのパラブル」の性的な描写を受けて、また彼がこの日何度か落胆しながら思い浮かべたプラムという言葉聞いて、物語とはあまり関係がない妻モリーの様々な扱い方などを想起しているが、彼はそれらを内心で「受けとめる」だけで、口にすることはない(17.709)。ブルームは静かに「プラムのパラブル」を聴き通した後、この物語の教訓に関わりがあると思われる「純粋な真理を追い求める3人」のモーセ、すなわち、モーセ、モーゼス・メンデルスゾーン(Moses Mendelssohn)、モーゼス・マイモニデス(Moses Maimonides)のことをスティーヴンに伝えている(17.710-11)。その直後、スティーヴンが純粋な真理を追い求める4人目としてアリストテレスを加えていることからわかるように、スティーヴンはブルームの解釈や反応を否定することはなく、むしろ、おおかた肯定しているようである。

スティーヴンはここで、聴き手であるブルームの様子を観察し、ブルームが編集室の人々とは異なり、「プラムのパラブル」を注意深く聴き、深く理解しようと努力する良い聴き手であることに気づいているようだ。それは、パラブ

ルを話し終えた後に、今回はスティーヴンが高笑いをする様子がないこと、つまり、聴き手であるブルームをからかう様子がないことや、アリストテレスはかつて「姓名不詳のユダヤ律法学者の弟子」であったとブルームが言うのと、二人の会話はすみやかに、『ユリシーズ』の主要なテーマのひとつであるアイルランドとユダヤの類似という重要な話題へと続いていくことでも暗示されている（17.718-60）。このアイルランドとユダヤの類似に関する議論は、スティーヴンのその後の創作に『ユリシーズ』のような深みを与え、彼の芸術家としての可能性をさらに押し広げることになったかもしれない。種を主題として扱うスティーヴンの「プラムのパラブル」は、こうして、最後には、良い聴き手としてのブルームを通して、不毛な地ダブリンで『ユリシーズ』のような大木になるべく、根を下ろし新芽を出し始めている。

イエスのパラブルは様々な時代、地域、文脈で受容され、様々なかたちで発展を遂げてきた。デイヴィッド・B・ガウラー（David B. Gowler）は2000年にわたるイエスのパラブルの受容の系譜をたどった著書『イエスにつづくパラブル』（*The Parables after Jesus*, 2017）の結びで、イエスのパラブルは聴き手や読み手にそのパラブルの解釈や機能の考察だけでなく、それらを踏まえた上でのアクティヴな思考や行動を促してきたことを強調している（228-29）。ガウラーはジョイスに関して言及していないが、イエスのパラブルを20世紀初頭のダブリンの文脈に合わせて新たな物語として発展させた「プラムのパラブル」は、間違いなく、そのアクティヴな思考や行動の好例と言えるだろう。加えて、ジョイスは『ユリシーズ』で、「プラムのパラブル」の語り手や聴き手の様子、彼らの前後の思考や行動を描き出し／ほめかし、このパラブルの解釈や機能だけでなく、それが語り手や聴き手に促した（であろう）アクティヴな思考や行動をも示していることは、特に注目に値する。

イエスのパラブルと同様に、『ユリシーズ』に関する議論も尽きることがない。前述の通り、「プラムのパラブル」によって、スティーヴンが将来『ユリシーズ』のような芸術にいたる可能性が暗示されているが、そのことを踏まえると、スティーヴンの良い聴き手であるブルームは、『ユリシーズ』のような難解な芸術作品を注意深く読み、その解釈や機能を理解した上で、アクティヴ

な思考や行動をとる読者を体現しているようにも思える。果たして、『ユリシーズ』は良い読み手に、どのようなアクティブな思考や行動をこれまで促してきたのだろうか、そして、これから促していくのだろうか。これらについては、別の機会に考察できれば幸いである。『ユリシーズ』に限らず、あらゆる芸術作品、あらゆる言語表現に対して、良い聴き手、良い読み手が増えることを祈願し、ひとまず筆を置くことにしたい。

註

- * 本稿は日本ジェイムズ・ジョイス協会第 27 回研究大会における拙発表「ジャーナリズムと戦う芸術家——『ユリシーズ』第 7 挿話再考」及び *Joycean Japan* No. 27 掲載の拙著研究ノート“Stephen’s Parable to Address the Pressgang”の内容に大幅に加筆・修正を加えたものである。本改稿には、一橋大学の金井嘉彦教授を中心とした『ユリシーズ』研究会の皆様が大変お世話になりました。また本稿は、慶應義塾学事振興資金の補助を受けて執筆されたものです。心より感謝申し上げます。
- 1) 原文は、“Buy two critics…Two just and strong men, each armed with seven newspapers—*quis sustinebit?* I speak in parables.” (*Letters* 2: 140)。〈誰が耐えられるだろうか〉(*quis sustinebit*) は、詩篇 130 番 (ウルガタ聖書では 129 番) 三節の「主よ、もしあなたが私たちの過ちを一つ一つ記憶しているとしたら、誰が耐えられるだろうか。」(“O Lord, if thou shalt be extreme to work iniquities who shall stand [*quis sustinebit?*]?”) という一文を参照している (*Letters* 2:140)。
 - 2) 本稿における『ユリシーズ』の引用は、すべて筆者が集英社訳と柳瀬訳を参考に訳したものである。また、『ユリシーズ』に関する出典情報はガブラー版 *Ulysses* の挿話番号と行番号を示している。以下、フリーマンズ・ジャーナル社はフリーマンズ社と、イヴニング・テレグラフ編集室は編集室と、「ピスガ山より臨むパレスチナ、あるいは、プラムのパラブル」は「プラムのパラブル」と呼ぶ。
 - 3) 筆者が新共同訳を参考に訳した。
 - 4) ここまで主にマタイによる福音書を参照したが、イエスがパラブルを用いて話す理由、「種をまく人のパラブル」、「意地悪な借地人のパラブル」、「からし種のパラブル」については、マルコによる福音書とルカによる福音書にも同様の記述が確認できる (Mark 4: 1–20, 12: 1–11, 30–32; Luke 8: 4–15, 13: 18–19, 20: 9–18)。註 3) のブロック引用を除き、聖書からの引用はすべて新共同訳である。
 - 5) 事件発生から 2 日後の 1882 年 5 月 8 日の『フリーマンズ・ジャーナル』6 ペー

ジに、フィーニックス公園殺人事件の「殺害現場図解」が掲載されている。この図は殺害現場とその周りの様子をアルファベット記号で示している（“Manifesto by the Irish Party”）。ギャラハーがこの殺人事件の位置情報を「ブランソンズ・コーヒーの広告」上のアルファベットに変換するというアイディアを、ジョイスはここから得た可能性がある。

- 6) この「無意味な騒音」（“Dead noise”）という表現は、ジョイスが愛した劇作家ヘンリック・イブセン（Henrik Ibsen）の劇『私たち死んだものが目覚めるとき』（*When We Dead Awaken*, 1899）のマイア・ルベック（Maia Rubek）の台詞「騒音や騒乱はそれ自体に死に関するものがある」（198）を参照している可能性がある。事実、この劇の題や内容と同様に、ステイーヴンは「無意味な騒音」であるブッシュ演説やテイラー演説からインスピレーションを得て、いきいきと「プラムのパラブル」を語っている。

参考文献

- Backus, Margot Gayle. *Scandal Work: James Joyce, the New Journalism, and the Home Rule Newspaper Wars*. U of Notre Dame P, 2013.
- Bazargan, Susan. “The Headings in ‘Aeolus’: A Cinematographic View.” *James Joyce Quarterly*, vol. 23, no. 3, 1996, pp. 345–50.
- Beck, Herald. “‘Aeolus’: A Sightseeing Tour.” Brockman, pp. 130–42.
- Benstock, Shari. “The Dynamics of Narrative Performance: Stephen Dedalus as Storyteller.” *ELH*, vol. 49, no. 3, 1982, pp. 707–38.
- The Bible: Authorized King James Version*. Oxford UP, 2008.
- Briskin, Irene Orgel. “Some New Light on ‘The Parable of the Plums.’” *James Joyce Quarterly*, vol. 3, no. 4, 1966, pp. 236–51.
- Brockman, William S., Tekla Mecsnober, and Sabrina Alonso, eds. *Publishing in Joyce’s Ulysses: Newspapers, Advertising and Printing*. Brill Rodopi, 2018.
- Donovan, Stephen. “‘Short but to the Point’: Newspaper Typography in ‘Aeolus.’” *James Joyce Quarterly*, vol. 40, no. 3, 2003, pp. 519–41.
- Ellmann, Richard. *Ulysses on the Liffey*. Oxford UP, 1972.
- Frumkin, Robert. “‘Ulysses: Stephen’s Parable of the Plums.’” *Colby Quarterly*, vol. 28, no. 1, 1992, pp. 5–18.
- Gifford, Don, and Robert J. Seidman. *Ulysses Annotated: Notes for James Joyce’s Ulysses*. U of California P, 2008.
- Gottfried, Roy K. *Joyce’s Iritis and the Irritated Text: The Dis-Lexic Ulysses*. UP of Florida, 1995.
- Gowler, David B. *The Parables after Jesus: Their Imaginative Receptions across Two Millennia*. Baker

- Academic. 2017.
- Hanger, Donald A. "Matthew's Parable of the Kingdom (Matthew 13: 1–52)." Longenecker, pp. 102–24.
- Hooker, Morna D. "Mark's Parable of the Kingdom (Mark 4: 1–34)." Longenecker, pp. 79–101.
- Ibsen, Henrik. *Samlede Værker [Complete Works]*. Vol. 10. Gyldendalske Boghandels P, 1902.
- Ito, Eishiro. "The Phoenix Park Murders and Stephen's Parable of the Plums: An Analysis of 'Aeolus'." *Journal of Policy Studies*, vol. 2, no. 3, 2000, pp. 257–70.
- Joyce, James. *Ulysses*. 1922. Annotated by Sam Slote. Alma Classics, 2012.
- . *Ulysses*. 1922. Ed. Hans Gabler, et al. Random, 1986.
- . *Letters of James Joyce*. Vol. 2. Faber and Faber, 1966.
- Kershner, R. Brandon. *The Culture of Joyce's Ulysses*. Palgrave Macmillan, 2010.
- Lawrence, Karan. *The Odyssey of Style in 'Ulysses'*. Princeton, 1981.
- Longenecker, Richard N., ed. *The Challenge of Jesus's Parables*. William B. Eerdmans P, 2000.
- MacDuff, Sangam. "The Self-Reflexive Text of 'Aeolus'." Brockman, pp. 156–74.
- Mahaffey, Vicki, ed. *Collaborative Dubliners*. Syracuse UP, 2012.
- "Manifesto by the Irish Party." *Freeman's Journal*, 8 May 1882. *British Library Newspapers*, gale.com.
- Martens, Allan W. "Produce Fruit Worthy of Repentance': Parables of Judgment against the Jewish Religious Leaders and the Nation." Longenecker, pp. 151–76.
- Nagashima, Yu. "Stephen's Parable to Address the Pressgang." *Joycean Japan*, vol. 27, 2016, pp. 35–42.
- Norris, Margot. *Virgin and Veteran Readings of Ulysses*. Palgrave Macmillan, 2011.
- "parable, n." *OED Online*, Oxford UP, September 2020, www.oed.com/view/Entry/137268.
- Riquelme, John Paul. *Teller and Tale in Joyce's Fiction: Oscillating Perspectives*. Baltimore, 1983.
- Senn, Fritz. "Types of News Events." Brockman, pp. 47–56.
- Spoof, Robert. *James Joyce and the Language of History: Dedalus's Nightmare*. Oxford UP, 1994.
- Stein, Robert H. "The Genre of the Parables." Longenecker, pp. 30–50.
- Weir, David. "Sophomore Plum(p)s for Old Man Moses." *James Joyce Quarterly*, Vol. 28, no. 3, 1991, pp. 657–61.
- アレント, ハンナ『人間の条件』志水速雄訳 筑摩書房, 2015年。
- ジョイス, ジェイムズ『ユリシーズ』丸谷オ一, 永川玲二, 高松雄一訳 全四巻 集英社, 2003年。
- .『ユリシーズ 1–12』柳瀬尚紀訳 河出書房新社, 2016年。
- 『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』日本聖書協会, 2008年。
- 永原和夫『『ユリシーズ』のアイオロス挿話 — 表現と実体』『小樽商科大学 人文研

究』第73輯, 1987年, 179-99頁。

東川正彦 「誰が「見出しを」つけたのか」 *Joycean Japan*, No. 13, 日本ジェイムズ・ジョイス協会, 2002年 71-87頁。

山田久美子 「語りの回転—『ユリシーズ』第7挿話「アイオロス」論」『英文学の地平 テクスト・人間・文化—植木研介先生退職記念論文集』要田圭治, 大嶋浩, 田中孝信編 音羽書房鶴見書店, 2009年, 147-64頁。

吉田宏予 「ダブリンのジャーナリズムとフリーマンズ・ジャーナル—*Ulysses* 第7挿話の周辺」 *Joycean Japan*, No. 13, 日本ジェイムズ・ジョイス協会, 2002年, 58-70頁。